心肺蘇生法に神様は必要か？

　――ズルズルズル。

　そんな音が、静かな部屋に大きく響く。

　テュポーンの魔の手から逃れ、家に帰った俺達は、無言で蕎麦を啜っていた。現在は九時過ぎ。かなり遅めの夕食である。運のいいことに、途中で落とした荷物はマンションの近くで見つかったのだ。また買い直すハメにならずに良かったと思う。

　ちなみに、蕎麦が盛られた容器は、俺は普通の丼だが、妖精モドキはお猪口である。妖精モドキの体に丁度いいサイズの容器が、これしかなかったのだ。ちなみに、箸の代わりに爪楊枝を使っている。

　妖精モドキは知ってか知らずか、蕎麦を音をたてて啜っていた。日本人の俺なんかより、実に和の嗜みがある。やはり、蕎麦はこういう風に食べるのが一番だ。ちなみに俺は、蕎麦を音をたてて啜れない。

「……美味しかった」

　汁を最後の一滴まで飲み干すと、爪楊枝をお猪口の上に置いて、満足そうに妖精モドキは呟いた。美味かったようで何よりだ。

「ごちそうさま」

　完食した俺が呟いた言葉に、妖精モドキは首を傾げる。どうやら、こういう習慣は冥府にはないらしい。まぁ、日本独自っちゃあ独自の文化だから、無理もないか。

　首を傾げただけで特に質問もされなかったので、俺はそれを説明することもなく、食器の後片付けに入った。

　さっと後片付けを済ませた俺達は、取り敢えず部屋に入る。正直疲れて眠くて堪らないが、明日も休みなので、俺は妖精モドキに事の真相を尋ねた。

　だが――

「あの、申し訳ないのですが、今日は疲れてしまったので、そこら辺の話は明日にしましょう」

　ずうずうしくも俺のベッドに潜り込みながら、妖精モドキはそう言った。

「……はい？」

「あ、いえ。ちょっと事情が変わったものですから。明日から、よろしくお願いします」

「待て待て。それはどういうことだ？」

「おやすみな……ああ、そういえば、ええっと、ああ、そうそう」

　俺を無視して瞼を閉じかけた妖精モドキだったが、何かを思い出したかのように、上半身を起こす。そうだ。ちゃんと説明しろ。「明日からよろしく」ってどういうことだ！

　だが、そんな俺の疑問は、解決しなかった。

「この世界の方々には、『名前』というものがあるそうですね。よろしければ、あなたの『名前』を教えていただけますか？」

「先に説明をしろ！」

「長くなります。もう遅いですし、あなたも疲れたでしょう？　大丈夫ですよ。私も買ってもらったアレの中身をまだ見ていないので、逃げませんって」

　アレ……？　ああ、食玩付きのラムネ菓子か！　今はどうでもいいわ！

「で、早く教えてくださいよ」

　急かすようにせがんでくる妖精モドキ。これは一体どういうことか、俺は心の中で頭を抱えていた。

「瞬……神野瞬だ。ほら、名前を教えたんだから、さっさと何があったのか――」

「おやすみなさーい」

　寝るなー！

　俺の叫び声が、部屋の外まで轟いた。

これについて翌日、俺はご近所の方々に頭を下げまくるハメになるなんて、この時の俺は考えもしなかった。